

大森奥山11号古窯跡発掘調査報告書

— 大森地内宅地造成に伴う発掘調査報告書 —

2016

岐阜県 可児市教育委員会

例 言

1. 本書は、岐阜県可児市大森1501番6457における大森奥山11古窯跡（21214-11676）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は可児市教育委員会が開発者である(株)ディーシー・クリエイトから委託を受け、平成28年1月25日から3月25日にかけて実施した。
3. 調査組織は下記のとおりである。

調査組織

教育長	竜橋 義朗
教育委員会事務局長	高木 美和（平成27年度）
	長瀬 治義（平成28年度）
文化財課長	長瀬 治義（平成27年度）
	川合 俊（平成28年度）
文化財係長	安藤 裕康
主任	長江 真和（調査担当）
主事	織田 真琴

5. 調査参加者は下記のとおりである。
後藤重信 多和田伴子 寺尾希美江 寺田國春 西田博 西田まゆみ 古川一美 堀木彰
本田博志 前田友子 三輪誠治
6. 本書の執筆は第1章は織田が、その他は長江が担当し、編集は長江が行った。遺物実測は長江・黒田祐規子が行い、トレースは長江が行った。遺構と遺物の写真撮影は長江が行った。
7. 遺物の図面及び写真は、口縁部や底部など土器の特徴がわかるものを選別して掲載し、小破片は掲載していない。
8. 現地調査及び整理作業の過程で、下記の各氏に多大なるご指導とご協力を賜った。深く感謝する。
（敬称・肩書略、五十音順）
伊藤真央 嘉見俊宏 中野晴久 平井義敏 藤澤良祐 森まどか 森村知幸 山本友子
9. 本書に掲載した出土遺物、図面、写真は、すべて可児市教育委員会（可児郷土歴史館及び収蔵庫）で保管している。

目 次

例 言

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 調査に至る経緯と経過	4
第3章 遺構	
第1節 竈体構造	8
第2節 物原と周辺の遺構	9
第4章 遺物	17
第5章 総括	29

報告書抄録

挿図目次

図 1	周辺遺跡地図	3	図 14	g-g' 土層図	16
図 2	区画配置図	5	図 15	h-h' 土層図	16
図 3	発掘調査前調査区全体図	6	図 16	i-i' 土層図	16
図 4	発掘調査後調査区全体図	7	図 17	j-j' 土層図	16
図 5	窯体図面	11	図 18	j'-j'' 土層図	16
図 6	窯主軸土層図	13	図 19	遺物実測図 1	20
図 7	C-C' 土層図	13	図 20	遺物実測図 2	21
図 8	a-a' 土層図	14	図 21	遺物実測図 3	22
図 9	b-b' 土層図	15	図 22	遺物実測図 4	23
図 10	c-c' 土層図	15	図 23	遺物実測図 5	24
図 11	d-d' 土層図	15	図 24	遺物実測図 6	25
図 12	e-e' 土層図	15	図 25	遺物実測図 7	26
図 13	f-f' 土層図	16			

表目次

表 1	大森奥山 11 号窯跡の周辺遺跡一覧	2	表 3	出土遺物観察表 2	28
表 2	出土遺物観察表 1	27	表 4	各窯の規模一覧	29

図版目次

図版 1	窯体 1	32	図版 6	その他の遺構 3	37
図版 2	窯体 2	33	図版 7	出土遺物 1	38
図版 3	窯体 3	34	図版 8	出土遺物 2	39
図版 4	窯体 4・その他の遺構 1	35	図版 9	出土遺物 3	40
図版 5	その他の遺構 2	36	図版 10	出土遺物 4	41

第1章 地理的・歴史的環境

地理的環境

可見市は、岐阜県中南部、木曾川中流左岸に位置し、東は土岐市、北東は御嵩町、西は坂祝町、南は多治見市と愛知県犬山市、北は木曾川を隔てて美濃加茂市、八百津町と接している。平成17年5月に可見郡兼山町と飛び地合併した。

地質的には、美濃加茂盆地の南部にあたり、木曾川と可見川及びその支流の久々利川に沿う低地には、洪積層と沖積層が広がっている。可見市南部に広がる丘陵は、東濃地方を中心に分布する瑞浪層群から成り立ち、蜂屋層、中村層、平牧層の3層に区分されている。土田地域から帷子地域の北部にかけては蜂屋層、可見川周辺では中村層、羽崎・二野地域周辺では平牧層が、それぞれ丘陵の裾部で確認される。主に凝灰質砂岩から成る平牧層は、多くの動植物化石を産出する他、露頭する部分で横穴墓が多数造られ、石材を使用した石棺の制作も盛んであった。

可見市南部から多治見市に続く丘陵地上部には、瀬戸層群上位の土岐砂礫層が広く分布し、大森奥山11号窯跡を含む大森奥山古窯跡群はこの土岐砂礫層に位置している。土岐砂礫層が分布する丘陵地の浅い谷は湧水湿地となっており、地域特有の希少な植物が生育している。

歴史的環境

大森奥山11号窯跡(1)の周辺には、同一丘陵の東側に大森奥山古窯跡群(1~12)が所在し、同一丘陵の北側には未調査の窯跡である大森奥山12号窯跡(2)が所在している。また、谷を挟んだ南側の低丘陵(現星見台)及び大森川沿いの低地には大森新田古墳群(13~24)が、その低丘陵西側の谷部に大森笹洞古窯跡群(25~32)が所在している。

大森新田古墳群(13~24)は、6世紀後半から7世紀初頭にかけて築造された12基から成る古墳群であり、いずれも円墳である。石室には大森川の崖面とその近辺で露頭するチャートの岩盤から採取した石材が使用され、大きな石材の間や閉塞石、礎床などには土岐砂礫層中の円礫が使用されている。初期に造られた大森新田5号墳(17)は竪穴系横口式石室が採用され、墳丘全体を覆う葺石が見られる。その他の古墳では横穴式石室が採用され、葺石は見られない。主な副葬品としては、須恵器(短頸壺・坏蓋・坏身・提瓶・横瓶)や金属製品(刀子・鉄鏃)、耳環、ガラス小玉等が確認される。可見市北部木曾川流域にみられる川合古墳群では、石室構造や墳丘規模に明確な優劣が存在するが、大森新田古墳群ではこのような階層差は認められない。そのため、墳丘規模の差や葺石の有無は、築造の時期差によるものと推測される(註1)。

その他の古墳として周囲に未調査の大森姫塚古墳(35)や米穴古墳(38)がみられる。また、大森川・久々利川流域では柿下西洞横穴墓群(40)や熊野西横穴墓群(41)などの横穴墓が多く築造されており、これらは平牧層から産出する石材を加工していた石工集団の墓群であると推測される(註2)。

岐阜県東濃地方の可見市・多治見市を中心に平安時代から室町時代にかけて築かれた灰釉陶器・山茶碗窯が数多く分布している。可見市では南西部に灰釉陶器窯・初期山茶碗窯、南東部に山茶碗窯が分布し、大森奥山古窯跡群はこの分布の中心に位置する。昭和60年の宅地造成に伴い調査を行った大森奥山古窯跡群は、土岐砂礫層を掘り抜いて造られており、鎌倉時代の山茶碗窯が10基確認されている。遺物は碗や皿を主体とした製品が出土している。窯跡周辺では炭焼窯と思われる遺構が検出され、窯跡との関連性が推定される(註3)。

大森奥山古窯跡群の南西に位置する大森笹洞古窯跡群は、土岐砂礫層を掘り抜いて造られた窯跡であり、溜池の岸边に位置しているため削平を受けている。いずれも未調査であるが、踏査や表探遺物から奈良時代の須恵器窯が1基、平安時代の灰釉陶器窯が3基、平安時代末期～鎌倉時代の山茶碗窯が4基と、計8基の古窯跡が確認されている。これら以外の窯跡として灰釉陶器窯と思われる二野鍋入古窯跡(39)、山茶碗窯跡である柿下2号窯跡(33)、姫塚東古窯跡(34)、吹ヶ洞古窯跡(37)が点在し、いずれも未調査である。

市内では南西部に平安時代後期の谷迫間2号窯跡・下切兎田古窯跡やこれに先立つ灰釉陶器窯がみられ、それより東側に鎌倉時代の大森奥山古窯跡群がみられる。また、南東部に鎌倉時代末期から室町時代前期の久々利奥磯山古窯跡群がみられ、窯跡の分布状況から燃料の枯渇による窯跡と陶工の漸次的な移動が推定される(註4)。

古墳や窯跡以外では中世の山城である吹ヶ洞砦跡(36)がみられる。横堀や土塁の横矢掛けなどの戦国時代後半の城郭に見られる複雑な城郭構造を持つ城跡であり、大森城主 奥村氏の城跡と伝えられる。この砦は奥村氏が築いた大森城の出城なのか、大森城を攻める際に築かれたのかは不明である。その他、集落跡とみられる遺跡は大森地区周辺では現在のところ確認されていない。

引用文献

- (註1) 可見市教育委員会「大森新田古墳群」2001
 (註2) 註1に同じ
 (註3) 可見市教育委員会「大森奥山古窯跡群」1985
 (註4) 註3に同じ

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	大森奥山11号窯跡	鎌倉	22	大森新田10号墳	古墳
2	大森奥山12号窯跡	鎌倉	23	大森新田11号墳	古墳
3	大森奥山1号窯跡	鎌倉	24	大森新田12号墳	古墳
4	大森奥山2号窯跡	鎌倉	25	大森笹洞1号窯跡	平安
5	大森奥山3号窯跡	鎌倉	26	大森笹洞2号窯跡	平安末期、鎌倉
6	大森奥山4号窯跡	鎌倉	27	大森笹洞3号窯跡	平安末期、鎌倉
7	大森奥山5号窯跡	鎌倉	28	大森笹洞4号窯跡	平安末期、鎌倉
8	大森奥山6号窯跡	鎌倉	29	大森笹洞5号窯跡	平安
9	大森奥山7号窯跡	鎌倉	30	大森笹洞6号窯跡	平安
10	大森奥山8号窯跡	鎌倉	31	大森笹洞7号窯跡	平安末期、鎌倉
11	大森奥山9号窯跡	鎌倉	32	大森笹洞8号窯跡	平安
12	大森奥山10号窯跡	鎌倉	33	柿下2号窯跡	平安末期、鎌倉
13	大森新田1号墳	古墳	34	姫塚東古窯跡	鎌倉
14	大森新田2号墳	古墳	35	大森姫塚古墳	古墳
15	大森新田3号墳	古墳	36	吹ヶ洞砦跡	戦国
16	大森新田4号墳	古墳	37	吹ヶ洞古窯跡	平安
17	大森新田5号墳	古墳	38	米穴古墳	古墳
18	大森新田6号墳	古墳	39	二野鍋入古窯跡	平安
19	大森新田7号墳	古墳	40	柿下西洞横穴墓群	古墳
20	大森新田8号墳	古墳	41	熊野西横穴墓群	古墳
21	大森新田9号墳	古墳			

表1 大森奥山11号窯跡の周辺遺跡一覧

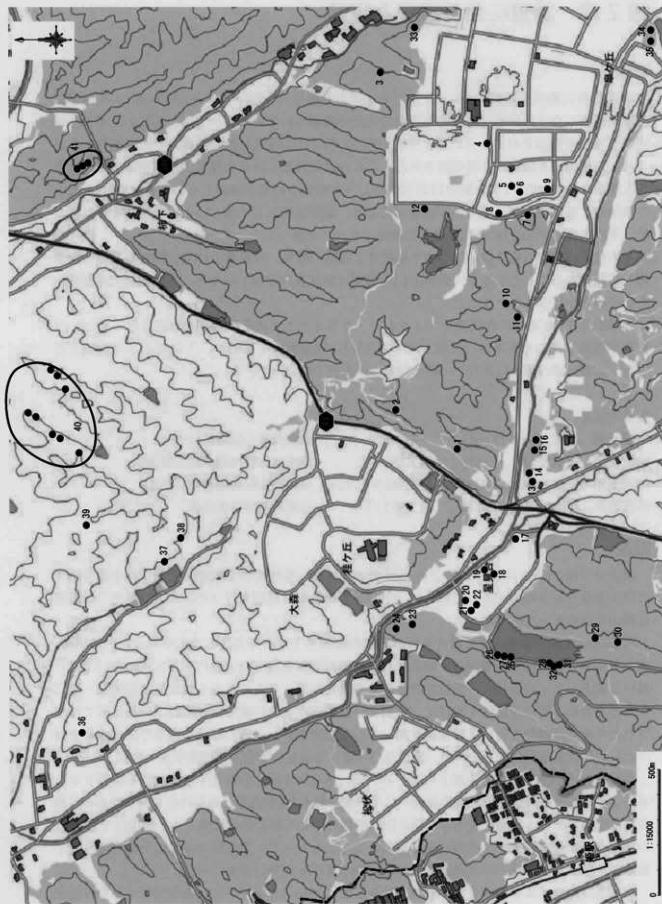


図1 周辺遺跡地図 (S=1/15,000) ((C)岐阜県の一部を改変)

第2章 調査に至る経緯と経過

経緯

平成25年に株式会社ディーシー・クリエイトが可見市大森地内において約8.4haの宅地造成工事を計画した。当該地には周知の埋蔵文化財は確認されていなかったが、近隣で山茶碗を焼成する窯跡が確認されていたため、平成25年12月12日に可見市教育委員会で踏査を行ったところ、新規の山茶碗窯が2基確認された。これらは同丘陵にある大森奥山古窯跡群の範疇であると想定されたため、「大森奥山11号古窯跡」、「大森奥山12号古窯跡」という名称を付した。

事業者が事前調査が必要である旨を伝え、範囲を明示して欲しいという依頼を受けたため、平成26年3月22日に調査に必要な範囲にテープを張った。

その後、古窯跡の取り扱いについて事業者と協議の結果、大森奥山12号窯跡を事業地の対象外とし保存することとなり、大森奥山11号窯跡は現状保存が難しいため、工事前に記録保存のための調査を行うこととなった。

平成27年11月30日に株式会社ディーシー・クリエイトと委託契約書の締結を行ったが、伐採等が難航したこともあり、平成28年1月25日に発掘調査を開始し、3月25日まで調査を行った。工事計画の都合により、一部の物原が未調査で終わった。

事務手続き

事業者発	平成26年1月16日		遺跡発見の届出について
市教委発	平成28年1月25日	教文第98号	埋蔵文化財発掘調査の報告
県教委発	平成28年2月10日	社文第59号の24	埋蔵文化財発掘調査（通知）
市教委発	平成28年3月31日	教文第117号	発掘調査終了報告書

経過

調査は平成28年1月25日から3月25日まで行った。現地観察で窯跡と想定される部分以外に凹みが見られる部分があったため、3トレンチを設定し掘削を行った。3トレンチでは遺構は検出されなかった。

調査前の地形測量後、表土剥ぎを行い窯壁の被熱ラインと分炎柱の検出を行った。検出後、被熱ラインと分炎柱から窯跡の主軸を出し、窯跡の割付を行った。窯内を4区画に分けて互い違いに掘削した。分炎柱より焚口側から多くの遺物が見られたことから焼成室と燃焼室・焚口を分けるため、更に2区画を設けた。床面上には焼台が左右の壁に寄せられている状況で検出されたため写真撮影を行い、原位置を動いている焼台を外し、窯の写真撮影及び図化作業を行った。図化作業後断ち割りを行い、窯壁及び床面、分炎柱の改修及び構築状況を確認した。

窯跡以外の部分では窯の主軸上に1トレンチ、掘り抜き排土の南北の堆積状況を確認するために2トレンチを設定した。窯の両側には平坦面が見られ、前庭部との関係性を見るために「窯北」、「窯南」という区画を設定し、窯北区は必要に応じて部分的に拡張した。窯南区ではSK1が検出された他は緩やかな自然地形で遺構は見られなかった。窯北区では地山を切り盛りして前庭部を拡張していることが確認された他、浅い溝であるSD1が見られた。

窯北及び窯南区より東側では、窯の主軸から東に25mの部分を中心に四方方向に大きな区画を設定した。南区には溝状の凹み（SD2）が見られ、雨水等による自然流路と考えられる。そ

の他は灰層や掘り抜き排土の堆積が見られるのみで、遺構は見られなかった。

主な調査過程

平成28年1月25日	調査前の地形測量、道具搬入、表土剥ぎ作業
1月27日	3トレンチの掘削作業開始
2月2日	3トレンチの掘削終了
2月8日	竈及び調査区の割付作業
2月9日	竈内、物原の掘削開始
2月23日	1・2トレンチの掘削作業開始
3月3日	竈完掘の写真撮影及び図化作業開始
3月9日	1・2トレンチの掘削終了
3月11日	竈図化作業終了、断ち割り開始
3月22日	竈断ち割り作業、竈北区及び竈南区の掘削終了
3月23日	SK1掘削終了

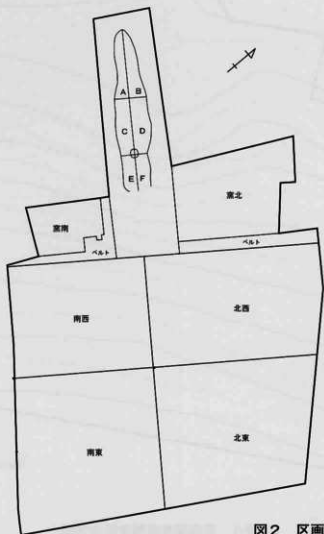


図2 区画配置図

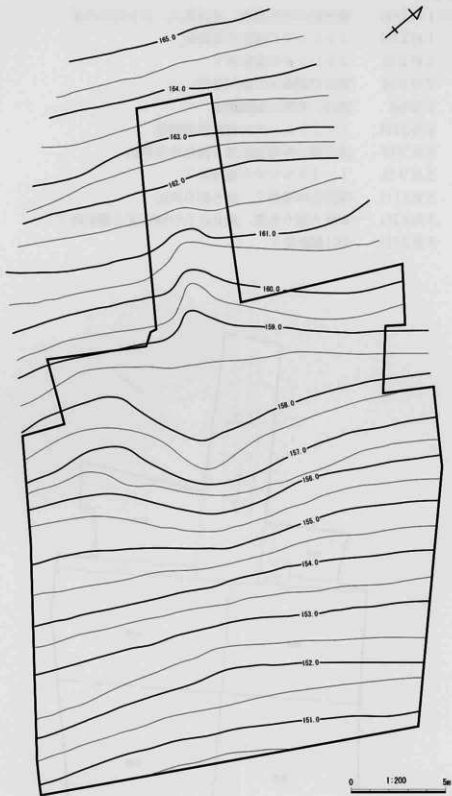


图3 发掘调查前调查区全体图

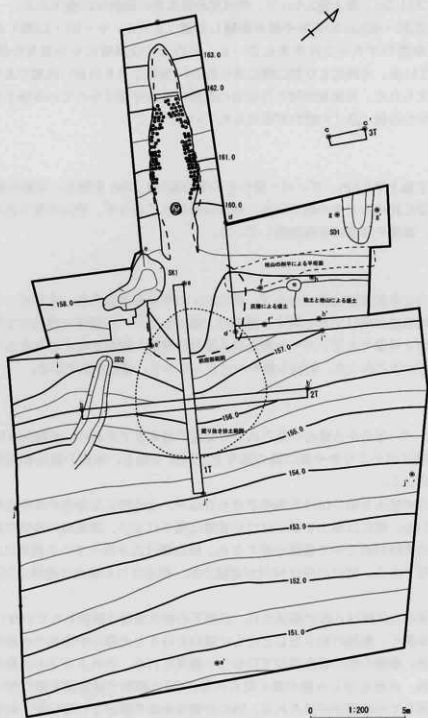


図4 発掘調査後調査区全体図

第3章 遺構

第1節 窯体構造

大森奥山11号窯跡は、分炎柱を有する山茶碗を焼いた窯である。南北にわたる東向き斜面中腹に立地し、土岐砂礫層を掘り抜いて築窯されている。窯体は標高163m～158mに位置し、規模は主軸上で11.2m、最大幅2.4mで、焼成室最終床面の傾斜は28度である。

窯内には厚さ20～40cmの天井や壁が崩落した層（6・8・9・10・13層）があり、被熱を受けた天井や壁のブロック片を含んでいる。その上には窯壁片を少量含む堆積土が15～50cm堆積している。分炎柱より焚口側に見られる14層はしまりの弱い灰層であり、最終焼成時の堆積と考えられる。床面検出時には左右の壁際に焼台が寄せられている様子が見られ、左側の壁に比べやや右側に多くの焼台が寄せられていた。

・煙道部

煙道部は、主軸上で2.6m、ダンパー部分との境の幅は1.28mを測る。床面の傾斜角は24度であり、焼成室に比べるとやや緩くなる。貼床は行われておらず、地山の掘り込みをそのまま利用しており、窯壁や床面は赤色被熱している。

・ダンパー

ダンパー部分に木芯痕跡は検出されず、約20cmの平坦面が見られ、すばまってきた窯壁がくびれを有し煙道部に向けてやや開く。窯壁の上端でもダンパー部分に合わせて凹みが見られる。北小木萱原2号窯でもダンパーと思われる部分の窯壁に緩やかなくびれをもち、床面に平坦な部分が40cmほどみられ、傾斜も緩やかになっており、様相が似ている。

・焼成室

焼成室はダンパー部分から焼台が見られる分炎柱の最奥までであり、主軸長は5.6mを測る。焼成室の最大幅は中央よりやや焚口側の部分で2.24mを測る。床面の幅は煙道部に向かって徐々に狭まっていく。

床面は一部分で粘土を貼り付けた指痕が見られるが、全体的には褐色や橙色を呈し、被熱により硬化している。壁には粘土を貼り付けた痕跡は見られない。焼成室の横位の断面形状は平坦であるが、分炎柱付近でやや壁際が高くなる。原位置付近を保っている焼台は119個であり、焼台は全て碗用である。焼台の列は38列が確認され、推定される焼台の総数は350個前後である。

断ち割り断面から床面は6枚が確認され、床面下の排水施設は確認されていない。20層である現在の床面は薄く、製品の取り出しとともに焼台をはずした際に中央部分がはがれていると思われるが、薄い堆積の中に黒色面が下にもう一枚見られる。それより下の4枚の床面はそれぞれ黒色、黄色、赤色を呈した層が薄く見られる。C-C'断面では床面を貼り付けている際に窯の規模を拡張している様子が見られる。窯の左側はあまり掘っていないが、右側では1次から6次床面に至るまでに15cmほど掘っている。

・燃焼室・焚口

燃焼室は主軸上で長さ2.8m、最大幅は分炎柱最奥で2.4mを測る。床面はほぼ水平であり、硬くしまっている。28層は浅い層の中に黒色の床面が2面見られる他、27層でも炭や灰が混じるしまりの強い層が見られる。地山に約10cmの貼床をした後に何度かの焼成により、27・28層がそのような土質になったことが窺える。焚口幅は1.48mを測る。

分炎柱は基部で短軸56cm、長軸60cmを測り焼成室に向かってややすばまる形状を呈する。高さ約84cmが残存し、元々は掘り抜きで造られたと思われるが、断ち割り断面から24層より上は再築されていることが分かった。中央部分に粘土や焼台を用いて芯を造り、その周囲にスサ入り粘土を貼り付けている。木芯の痕跡は見られず中央部分は黒色に硬く焼けている。分炎柱の外周は灰褐色に硬化しているが、自然軸の付着は見られない。分炎柱から窯壁までの距離は右側がやや壁まで広い。

・前庭部

前庭部は焚口より谷側に約5.4m、南北に約5.0mの範囲に見られる。掘り抜き排土を傾斜面に盛り平坦面を造成しており、窯の北側では遺物を含む堆積土(69層)が見られるため、部分的に拡張していると思われる。前庭部の基礎となる掘り抜き排土の範囲は、しまりの弱い流れた53層を含めると南北に約7.0m、東西に8.7mの範囲に広がる。掘り抜き排土の厚さは最も厚い部分で約1.0mである。

第2節 物原と周辺の遺構

・物原

物原の範囲は、窯の焚口より谷側に約21m、南北に約21mと焚口より下方の調査範囲がそれに当る。その中で土層から見られる黒色味のある灰層の範囲は焚口から谷側へ11.4m、2トレンチ部分で南北に約10mの範囲に及ぶ。窯の主軸上での純粋な灰層は28層のみで10cm程度と浅いが、b-b'断面(図9)の厚い部分で約60cmの堆積となっている。灰層の上には灰層が混じった遺物を含む層が堆積しており、j-j'断面(図17)付近では堆積土は約20cmであり、出土する遺物や焼台は細片が多くなる。

・窯北区

窯北区では、平坦面を拡張している様子が確認された。築窯した当初は地山を削り出し、幅約1.7mの平坦面を造成している。窯を操業した後に、窯跡付近では失敗品や焼台を含む灰層(69・82・83層)を盛土し、北側では粘土層(87層)、地山(85・86層)を盛り、平坦面を約4.0mの幅に拡張している。また、窯より離れた東側では、i-i'断面(図16)に見られるように灰層(92層)の上に地山(90・91・93層)を盛土して拡張している様子が見られる。盛土に使用された地山には遺物が混じっており、b-b'断面(図9)では灰層の上に地山を削平した55層及び19層が造成されている。北東方向は調査期間の関係で未掘削の部分もあるため、平坦面は北東方向に広がっている可能性が考えられる。

この平坦面には柱穴やロクロピットなどは見られない。87層の粘土を含む層は窯跡付近では検出されず、北側のみで見られる。他の区画で見られない炭を伴う白色粘土が部分的に見られることから山茶碗制作等に関わる作業場の可能性も考えられる。ただこの平坦面には排水溝が見られず、調査中の降雨後でも雨水が一面に溜まるため、排水状況は良好とはいえない。

・SD1

窯北区で北西から南東方向に走る。幅約1.6mで深さは6cm程度と浅く、谷側で浅くなり消える。

3トレンチで見られた自然の凹みから連続する自然の凹みと考えられる。

・窯南区

窯南区にはSK1がみられる。SK1は3.2m×3.2mの不整形の土坑で床面付近では原位置を保つ遺物は見られなかった。窯南区にはこれ以外の遺構は検出されず、緩やかな斜面地形となる。窯北区は後述するが土坑等は検出されておらず、本窯と近い時期である大上2・3号窯、萱原6号窯などでも窯の左側に山茶碗や焼台が集積された作業場と考えられる土坑が検出される例があることから、SK1も製品の出し入れに伴う作業場の可能性が想定される。e-e'断面(図12)では、80層と73~75・77からなる灰層の間に、76・78・79層の間層が見られる。窯の操業をしていない時期に間層が堆積した可能性も考えられるが、81層も含めこれらの層の遺物には時期差は認められない。

・3トレンチ

3トレンチは調査前の現地観察の際に、緩やかな凹みが見られ、窯跡の可能性も考えられたため、トレンチを設定した。現地表面より10~20cmで黄褐色の地山となり、窯跡と思われるような床面や被熱面は見られなかった。

・SD2

SD2は、調査前にも緩やかな窪みが見られていた溝である。幅約1.2m、長さ約6.0mで、北東から南西にかけて走る。b-b'断面(図9)付近で最も深く約25cmの深さを測り、南西に向かって浅くなり消える。前庭部からの排水を意識していると考えられる。

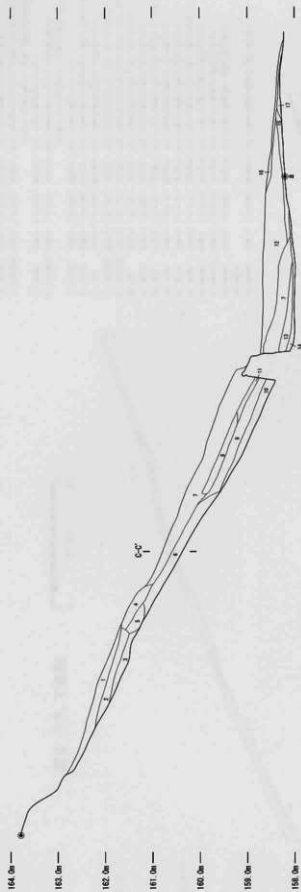


図 6 窯主軸土層図

- | | | | | | |
|----|-----|-----|-------|------|------------------------------|
| 1 | 黄褐色 | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 05-40mmの層をわずかに含む(粘質土) |
| 2 | 褐色 | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 05-50mmの層をわずかに含む(腐植土を伴った粘質土) |
| 3 | 黄褐色 | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 05-20mmの層をわずかに含む(腐植土を伴った粘質土) |
| 4 | 黄褐色 | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 05-20mmの層をわずかに含む(腐植土を伴った粘質土) |
| 5 | 黄褐色 | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 05-20mmの層をわずかに含む(腐植土を伴った粘質土) |
| 6 | 黄褐色 | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 05-20mmの層をわずかに含む(腐植土を伴った粘質土) |
| 7 | 黄褐色 | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 05-40mmの層をわずかに含む(腐植土を伴った粘質土) |
| 8 | 黄褐色 | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 05-60mmの層をわずかに含む(腐植土を伴った粘質土) |
| 9 | 黄褐色 | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 05-20mmの層をわずかに含む(腐植土を伴った粘質土) |
| 10 | 黄褐色 | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 05-20mmの層をわずかに含む(腐植土を伴った粘質土) |
| 11 | 黄褐色 | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 05-50mmの層をわずかに含む(腐植土を伴った粘質土) |
| 12 | 黄褐色 | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 05-50mmの層をわずかに含む(腐植土を伴った粘質土) |
| 13 | 褐色 | 砂質土 | しまり強い | 粘性強い | 05-50mmの層をわずかに含む(腐植土を伴った粘質土) |
| 14 | 褐色 | 砂質土 | しまり強い | 粘性強い | 05-50mmの層をわずかに含む(腐植土を伴った粘質土) |
| 15 | 黄褐色 | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 05-20mmの層をわずかに含む(腐植土を伴った粘質土) |
| 16 | 黄褐色 | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 05-20mmの層をわずかに含む(腐植土を伴った粘質土) |
| 17 | 黄褐色 | 砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 05-60mmの層をわずかに含む(腐植土を伴った粘質土) |

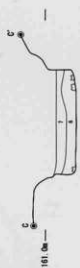


図 7 C-C'土層図



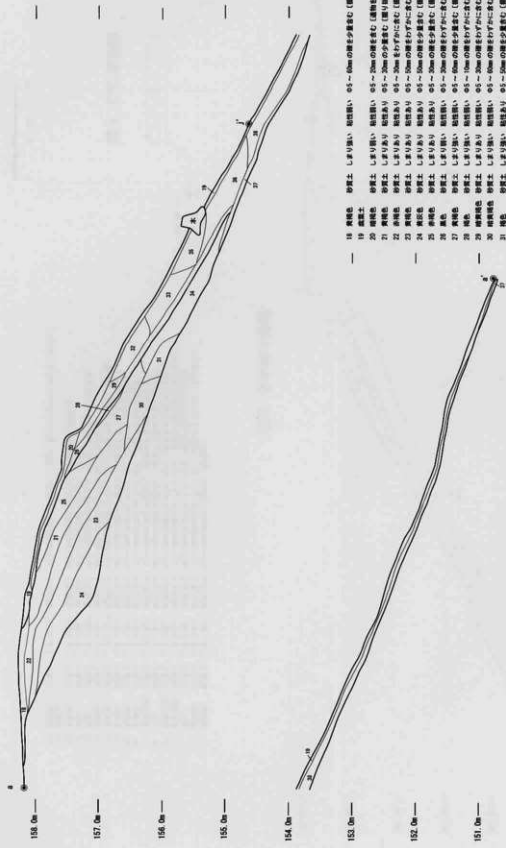


図 8 a-a' 土層図

- 18 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-10mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 19 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-20mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 20 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 21 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 22 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 23 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 24 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 25 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 26 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 27 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 28 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 29 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 30 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 31 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 32 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 33 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 34 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 35 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 36 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 37 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)
- 38 黄砂土 しまり強い、粘り強い、0.5-30mmの粒径を少量含む (混り混砂土)



図 13 f-f' 土層図

- 82 黄灰色 砂質土 しまりあり 粘性強い 0.5~20cmの層を少量含む(運物、橋台を含む平坦部区域のための層土)
- 83 黄褐色 砂質土 しまりあり 粘性強い 0.5~20cmの層を少量含む(運物、橋台を含む平坦部区域のための層土)
- 84 黄褐色 砂質土 しまりあり 粘性強い 0.5~20cmの層を少量含む(運物、橋台を含む平坦部区域のための層土)
- 85 黄褐色 砂質土 しまりあり 粘性強い 0.5~20cmの層を少量含む(運物、橋台を含む平坦部区域のための層土)
- 86 黄褐色 砂質土 しまりあり 粘性強い 0.5~20cmの層を少量含む(運物、橋台を含む平坦部区域のための層土)
- 87 灰白色 粘質土 しまりあり 粘性強い 0.5~20cmの層を少量含む(運物、橋台を含む平坦部区域のための層土)

図 14 g-g' 土層図



図 15 h-h' 土層図

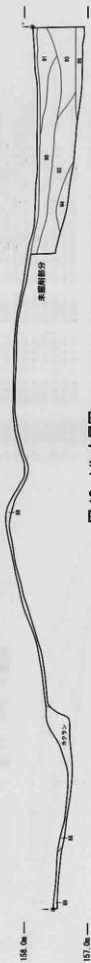


図 16 i-i' 土層図



図 17 j-j' 土層図



図 18 j'-j'' 土層図

- 88 黄褐色 粘質土 しまりあり 粘性強い 0.5~20cmの層を少量含む(運物、橋台を含む平坦部区域のための層土)
- 89 黄褐色 粘質土 しまりあり 粘性強い 0.5~20cmの層を少量含む(運物、橋台を含む平坦部区域のための層土)
- 90 オリーブ灰色 粘質土 しまりあり 粘性強い 0.5~20cmの層を少量含む(運物、橋台を含む平坦部区域のための層土)
- 91 黄褐色 粘質土 しまりあり 粘性強い 0.5~20cmの層を少量含む(運物、橋台を含む平坦部区域のための層土)
- 92 黄褐色 粘質土 しまりあり 粘性強い 0.5~20cmの層を少量含む(運物、橋台を含む平坦部区域のための層土)
- 93 黄褐色 粘質土 しまりあり 粘性強い 0.5~20cmの層を少量含む(運物、橋台を含む平坦部区域のための層土)
- 94 黄褐色 粘質土 しまりあり 粘性強い 0.5~20cmの層を少量含む(運物、橋台を含む平坦部区域のための層土)
- 95 黄褐色 粘質土 しまりあり 粘性強い 0.5~20cmの層を少量含む(運物、橋台を含む平坦部区域のための層土)

第4章 遺物

(1) 山茶碗類

・山茶碗

山茶碗は主に灰色及び灰白色を呈し、焼成がやや不良のものが黄白色を呈するが、全体の割合として焼成不良なものは少ない。全ての個体の底部外面に回転糸切痕が見られ、底部内面に回転糸切痕が見られる個体もある。

山茶碗の口径は13.5～16.2cm(平均14.4cm)、底径5.0～6.8cm(平均5.8cm)、器高5.0～6.0cm(平均5.4cm)を測る。碗の体部は底部から口縁部にかけて直線的なものが主体で、体部下半に弱い丸みを帯びるものも見られる。口縁部では直線的なものと同様に肥厚なものも見られ、後者は口縁部下で凹みを有するものが多い。底部は均等な厚みを有する個体が多いが、一部で底部中央に向かって薄くなるものも見られる。176は口縁部端部が内側に折れ、全体の中の2点のみがこのような口縁部を有する。高台は断面形状が三角形であるが、重ね焼きの際につぶれるものも多い。

計測は底部が4分の1以上残る6701点について行ったが、底部に対して口縁部が残っている資料が少なく、数値を出しているのは底部のみであり、これは小皿も同様である。底径の平均は5.7cmで、数値は5.5～6.0cmに62%が集中するがばらつきがある。口径が測れたものについても数値にはばらつきが見られる。内面に指ナデが見られる碗は6%であるが、実測した碗では49%に指ナデが入り、完形に近いものでは半分程度の割合に入る。指ナデは主に底部に見られるが、体部に入るものも見られる。指ナデは1度のみではなく、複数入るものも散見される。底部外面に木目状圧痕が見られる個体は10.7%である。

・無高台碗 (23)

碗に高台が見られないもので器形や成形技法は他の山茶碗と同様である。無高台碗は窯道具の蓋に転用されているものも含めて全体の1%未満である。

・片口碗 (165・217)

口縁部に指で突出させた片口部を有する。片口部の外面両脇には指で押さえた痕跡が見られる。217は他の山茶碗より一回り大きい。内面に重ね焼きをはがした痕があり、内面の痕跡から底径6.4cm程度の碗を重ねたと思われる。また、高台も欠けている部分があるため、重ね焼きの間に入れて焼かれている。片口碗は10点が見られる。

・穿孔碗 (145・177)

145・177は底部に外側から内側にかけて穿孔される。器形では他の山茶碗とは差が見られない。穿孔が見られる碗が14点見られるが、穿孔部分は主に底部に穿孔され、体部に穿孔されるものは1点のみ見られる。

(2) 小皿類

・小皿

小皿も碗同様に灰色または灰白色を呈するが、碗に比べると焼成不良なものは少ない。器形

は体部から口縁部にかけて直線的に開くものが多く、体部下半に弱い丸みをもつ器形も少量が見られる。口縁端部は丸く収めるものと肥厚するものがある。後者は口縁部下に凹みを有するものが多く、山茶碗と同様の傾向が見られる。法量は口径6.7~10.1cm(平均8.2cm)、底径3.4~4.8cm(平均4.0cm)、器高1.5~2.5cm(平均2.0cm)を測る。

特徴的な器形である162は体部下半に段を持ち、口縁部はわずかに外反する。180は口縁部下方から端部にかけて内傾し直線的に立ち上がる。小片であるため、蓋の可能性も考えられる。

計測は底部が4分の1以上残る2097点を行った。底径の平均は3.36cmで、数値は3.5~4.0cmに約70%が集中するがばらつきがあり、これは計測が可能であった口径も同様にとらつきがみられる。内面に指ナデが入る小皿は13%であり、指ナデが入る割合は山茶碗よりも小皿の方が高い。また実測した個体では、67%に指ナデが入る。底部外面に木目状圧痕が見られる個体は21.6%である。

・平高台皿 (156・186・187・219・228)

小皿に平らな高台が付いたものである。186は底部が厚く、底部内面は中央がやや盛り上がる。187は体部から口縁部にかけて外側に開き、口縁部が肥厚する。他の小皿よりも厚みがあり、底部も斜めに糸切りされるなど、作りはやや粗雑である。228は体部から口縁部にかけて直線的であり、口縁部がやや肥厚するが全体的に薄手である。156・219は底部のみが残存しており、厚みがある。

・高台付皿 (215・216)

断面が三角形を呈する付高台をもつ小皿である。基本的には小皿の形態と変わりはないが、215は体部から口縁部にかけて急な角度で開く。底部外面には回転糸切痕が見られ、高台端部に靱殻圧痕は見られない。

・片口小皿 (181)

口縁部を一部台形状に切り込み、片口を作っている。器高がやや低く、他の小皿に比べやや薄手である。

(3) その他の器種

・瓶類 (166・167・189・190)

166は瓶類の口縁部である。頸部から口縁部にかけて大きく外反し、端部を丸く収める。167は瓶類の底部であり、胴部下半はヘラケズリによって調整されている。底部はヘラ切り調整である。166・167は山茶碗に比べると良好な粘土が使用されている。189・190は瓶類の底部である。189はやや粗雑な作りであり、底部はヘラ切りされて靱殻圧痕が見られる。他の瓶類に比べ、やや大型である。190は内外面にボロと自然釉が付着して歪みが大きい、167と似た器形と思われる。

・円筒容器 (188)

円筒形の口縁部である。器厚は薄く、頸部付近から口縁部にかけてやや外側に開き、端部は丸く収める。外面にはボロと自然釉が付着している。長い頸部をもつ瓶類の可能性がある。

・短頸壺 (218)

頸部は短く外傾し、口縁端部は丸く収める。胴部最大径は中央付近であり、肩はやや張る。

・蓋 (106・182・184・185・227)

天井部及び底部は、やや凹むものと水平気味のものが見られる。口縁部は丸く収め、底部外面に回転糸切痕が見られる。天井部にボロや自然釉が付着する個体もある。218のような壺や瓶類用の蓋に使用されたと考えられる。182は、口縁端部がやや上方に引き出されるもので器高の低い蓋になるとと思われる。

(4) 窯道具

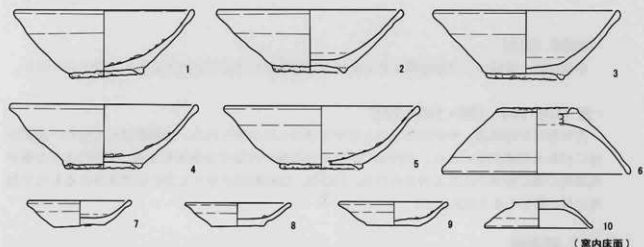
・蓋 (10・30・75~79・103~105・112・113・131・146・147・183・226)

窯道具は焼台と重ね焼きの際にボロや自然釉の付着を防ぐために上に乗せた蓋がある。蓋は主に焼成された製品が転用され、底部外面にボロ、自然釉が全体的に付着しているものを蓋としている。蓋には山茶碗と小皿が転用されたものが見られ、基本的には製品の碗や小皿と器形に違いは見られない。その中で112は無高台で口径がやや小さく、器高も高くなることから蓋用に作られた可能性がある。

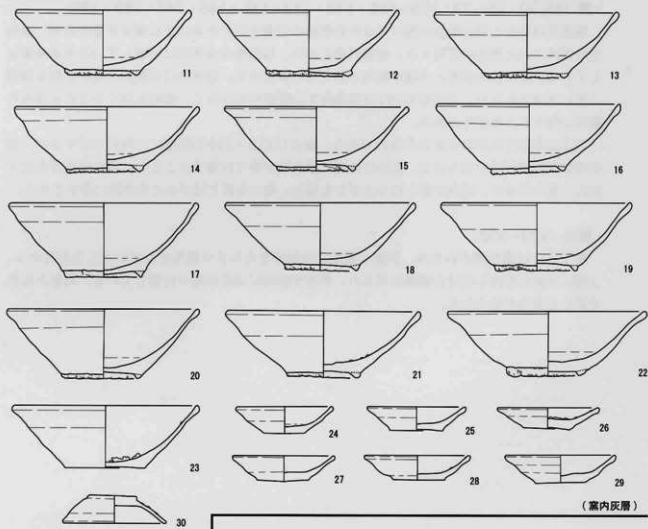
183は高台付皿が転用されたものである。高台は215・216と同様に三角形を呈するが、高台端部に靱殻圧痕が見られる。226は外面に自然釉が多く付着することから蓋に転用された小皿だと思われるが、器高が低く立ち上がりも短い。他の小皿と比べると全体的に厚手である。

・焼台 (229~232)

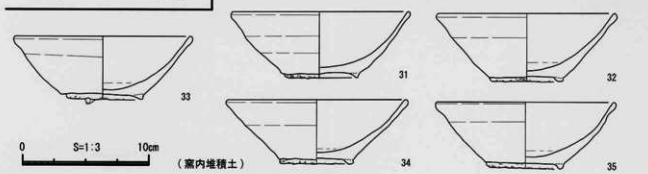
粘土内には藁や礫がみられ、前面と側面には指押さえにより整形されていることが分かる。上面には焼台を押し付けた痕跡が見られ、側面や前面には自然釉が付着している。褐色と灰色を呈した部分が見られる。



(墓内床面)



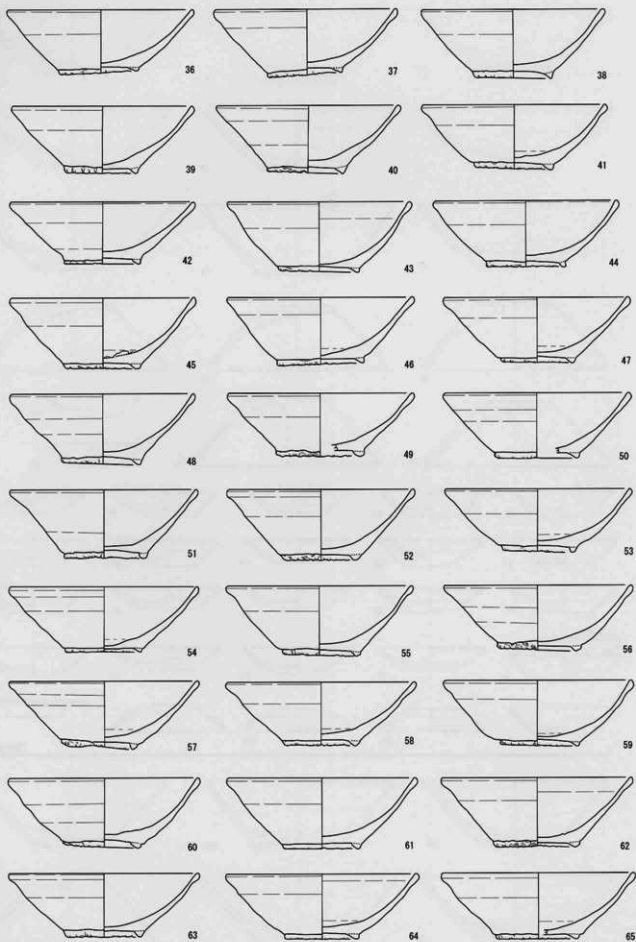
(墓内灰層)



0 S=1:3 10cm

(墓内堆積土)

图 19 遺物実測図 1



(窟内堆积土)

图 20 遗物实测图 2

0 S=1:3 10cm

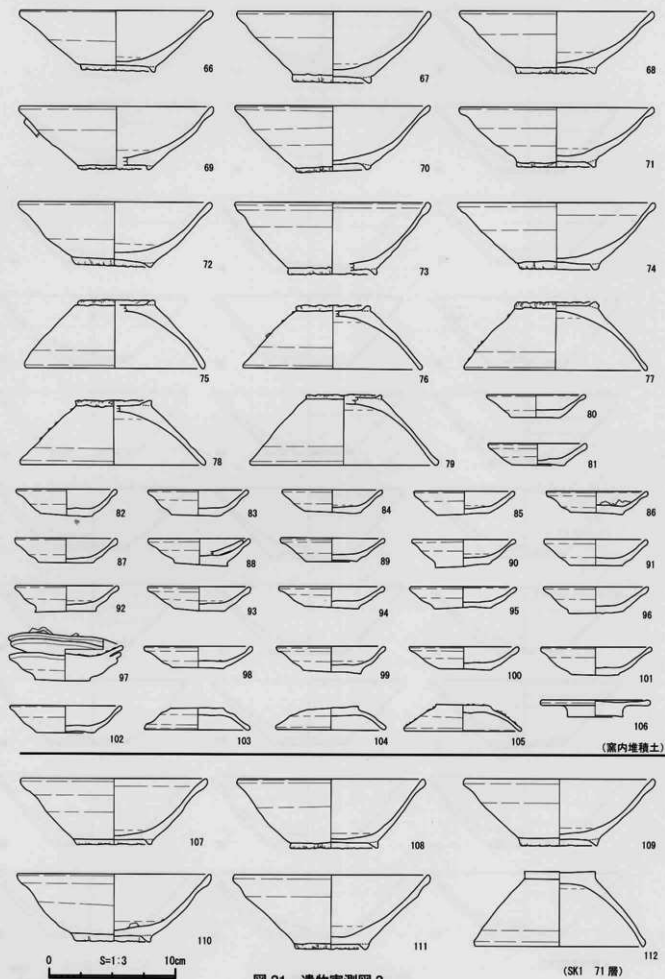


图 21 遺物実測図 3

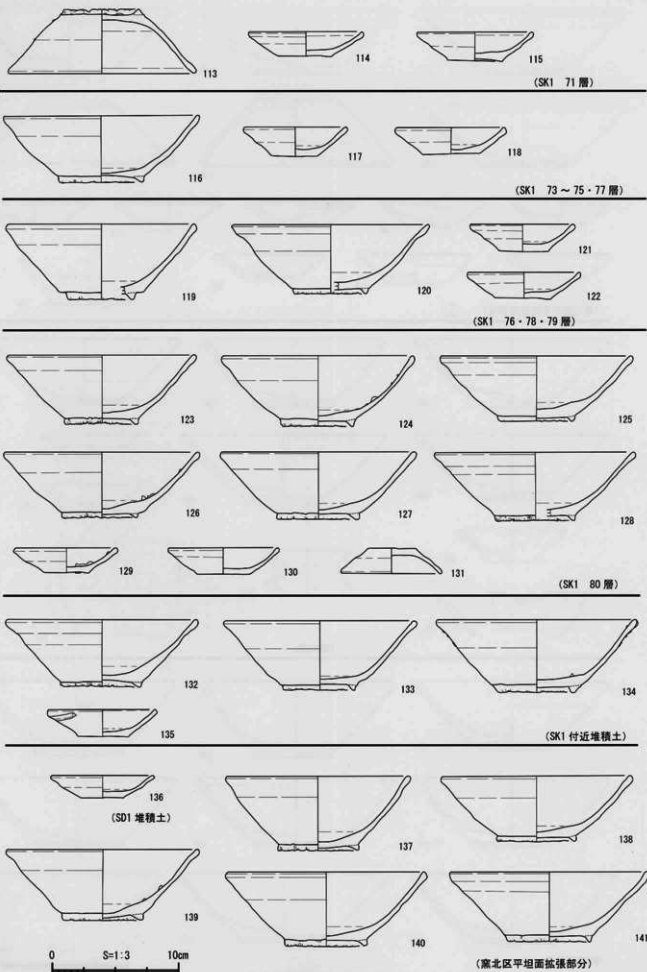
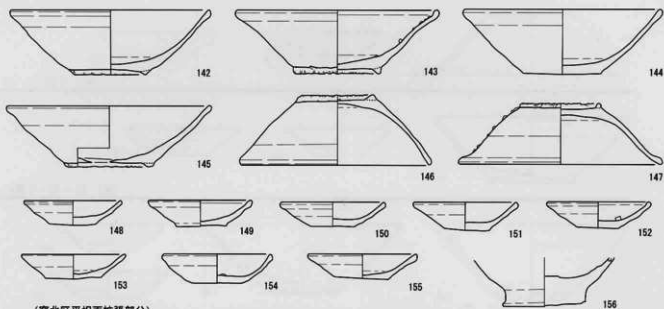
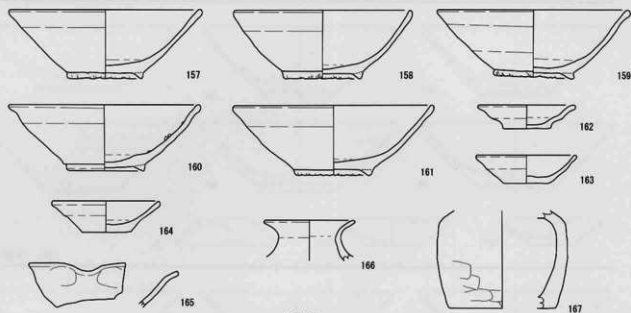


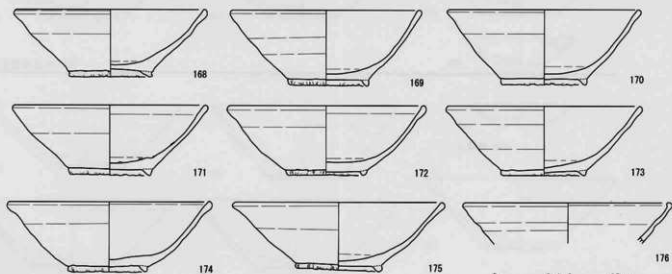
图 22 遺物実測図 4



(冀北区平坦面弧弦部分)



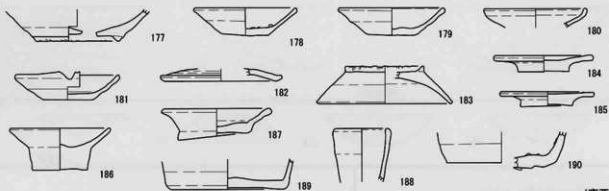
(冀北区)



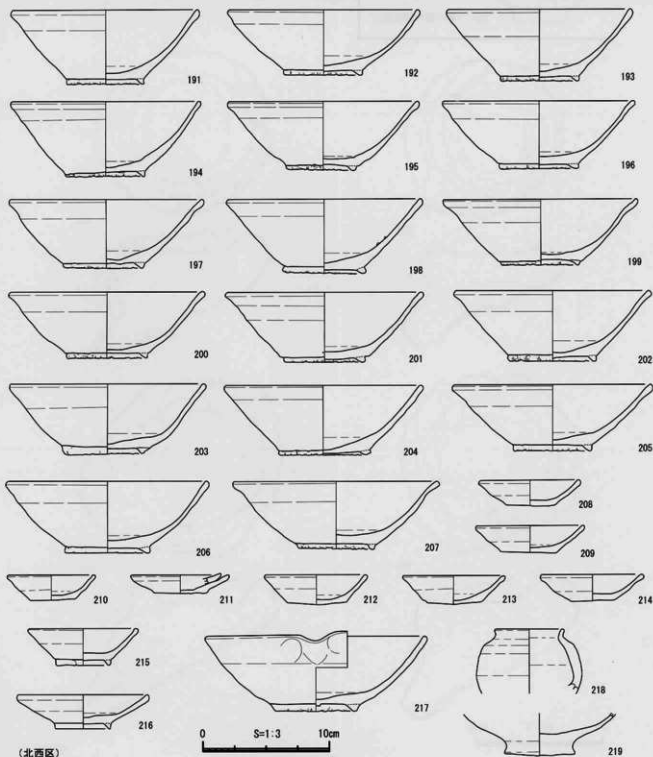
(南西区灰层)

0 S=1:3 10cm

图 23 遗物实测图 5

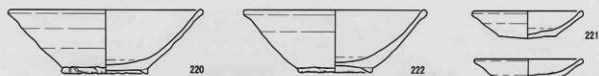


(南西区灰层)

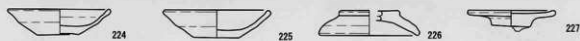


(北西区)

图 24 遗物实测图 6



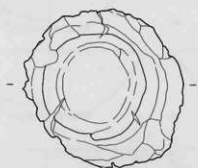
(南東区)



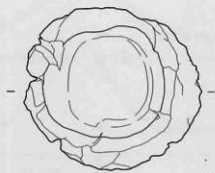
(北東区)



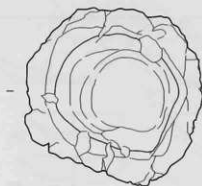
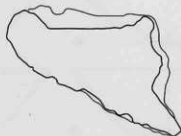
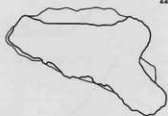
228 (室C区外側堆積土)



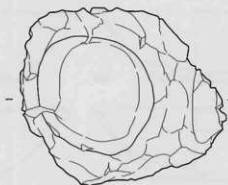
229



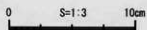
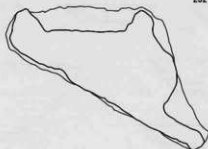
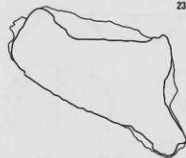
230



231



232



(床面)

图 25 遺物実測図 7

第5章 総括

(1) 窯体について

大森奥山11号窯は、地山掘り抜きで造られた半地下式の山茶碗専焼窯で、窯体はこの時期に良く見られる胴張りの少ない細長い平面形を呈する。掘り抜いた土は窯の前に盛られ、前底部として平坦面が造られるほか、操業中に灰層や地山を用いて、平坦面を拡張している様子が見られた。また、窯体の断ち割り調査の結果、6面の床が確認でき、床面を張りながら窯の規模を拡張している様子も見られた。分炎柱も造り直されているようで、基部のみ地山が残存し、それより上は焼台や粘土によって構築されていた。ダンパー部分は検出されなかったが、焼成室から煙道部にかけてゆるやかな平坦面をもつ構造は、丸石3号窯期に比定される北小木董原2号窯にもみられ、焼成室と煙道部の境に段を持つ構造は、北小木大上7号窯（窯洞1号窯期）、北小木大上10号窯（白土原1号窯期）に見られる。

床面上で焼台が左右の壁に寄せられている状況で検出されたことから、製品の取り出し作業をするとともに中央付近の焼台を左右の壁に寄せたと考えられる。窯内に遺物がほぼ見られない状況からは、製品取り出し後に天井や壁が崩落し、本窯の役目を終えたとも考えられる。

同時期の窯跡では、本窯は大森奥山2号窯と比較的近い測定値であるが、焼成室の規模や煙道部の長さはやや小さめである。また、製品の出し入れのためなのか、燃焼室と焼成室の境の幅が他の窯に比べて40cm以上大きいのは特徴と言える。

窯名	説明	主軸長				窯体幅			分炎柱	積り角	
		全長	焼成室	煙道部	煙道部	開口	最大幅	燃焼室と焼成室の境			焼成室と煙道部の境
大森奥山11号窯		11.2	2.8	5.6	2.6	1.48	2.4	2.4	1.28	0.56×0.6	28
窯跡4号窯	浅間山下一丸石3	8.52	1.8	5.8	(0.9)	1.2	2.3	1.62	0.84	0.66×0.62	25
窯跡6号窯	浅間山下一丸石3	9.7	2.0	5.5	2.2	1.12	1.94	1.62	1.02	0.6×0.61	30
大上1号窯	丸石3	13.4	2.2	6.3	4.15	0.85	2.53	1.56	0.9	0.7×0.57	25
大上9号窯	丸石3	13.13	2.24	6.1	4.7	1.22	2.3	1.8	1.08	煙0.59	26
窯跡2号窯	丸石3	9.73	2.04	5.3	(1.3)	0.8	2.02	1.56	0.84	0.84×0.55	30
窯跡5号窯	丸石3	11.48	2.40	6.10	3.00	1.00	2.35	1.68	0.78	煙0.59	20
住吉2号窯	丸石3	9.10	2.00	5.70	1.40	1.30	2.10	1.86	1.08	煙0.7	25~31
住吉5号窯	丸石3	10.80	2.40	6.70	1.70	1.00	2.60	2.00	0.90	煙0.8	27~29
住吉6号窯	丸石3	12.70	2.90	6.40	3.10	1.40	2.20	2.00	1.02	煙0.6	24~25
住吉14号窯	丸石3	8.70	1.90	6.10	0.70	1.00	2.10	1.92	1.38	煙0.7	27~35
甲賀6号窯	丸石3	(12.71)	2.11	6.85	(3.57)	1.05	2.38	1.82	0.93	0.57×0.54	29
甲賀7号窯	丸石3	10.37	2.23	4.71	3.37	0.96	2.14	1.88	1.36	0.48×0.42	30
甲賀8号窯	丸石3	11.72	2.16	6.60	2.88	0.98	2.00	1.66	1.13	0.65×0.88	38
大森奥山2号窯	丸石3	11.75	3.09	5.88	2.6	1.25	2.4	1.71	0.66	煙0.55	31
大森奥山4号窯	丸石3	12.43	2.76	5.79	3.88	1.28	2.4	1.91	0.79	0.52~0.55	27
大森奥山5号窯	丸石3	12.84	3.09	6.48	3.07	1.3	2.42	1.78	0.79	0.6×0.5	29
大森奥山6号窯	丸石3	15.45	3.45	7.38	4.62	1.0	2.23	1.58	1.05	煙0.5	28
北石12号窯	丸石3	(6.98)	(2.48)	(4.48)	—	0.94	2.8	1.86	—	0.7×0.5	15.5
北石16号窯	丸石3	13.1	2.5	7.6	3.0	1.2	2.36	1.74	0.87	0.56×0.51	26
北石18号窯	丸石3	11.81	2.45	6.16	3.2	1.47	2.46	2.04	0.78	0.56×0.45	25
丸石8号窯	丸石3	9.7	1.8	5.4	2.5	1.8	2.3	1.68	0.66	1.0×0.8	31
丸石9号窯 (古)	丸石3	10.4	4.2	3.8	2.4	0.96	2.3	1.92	0.96	0.7×0.7	30
丸石10号窯	丸石3	10.7	2.4	5.9	2.4	1.02	2.5	1.5	1.08	1.0×0.8	30
丸石9号窯 (新)	窯跡1	7.2	2.7	3.5	1.0	1.5	1.9	1.8	0.9	0.6×0.5	26
丸石11号窯	窯跡1	8.4	0.7	5.2	2.5	1.5	2.3	1.38	0.78	0.7×0.7	31
北石17号窯	窯跡1	11.98	2.64	5.8	3.54	0.93	2.62	2.0	0.66	0.47×0.34	24
大森近隣洞3号窯	窯跡1	(6.75)	—	—	—	1.05	2.14	1.67	—	0.64×0.51	21
窯跡1号窯	窯跡1	13.5	2.4	7.2	3.9	1.0	2.7	1.9	1.0	煙夫煙0.76	24
大上2号窯	窯跡1	15.10	2.30	7.10	5.30	0.96	2.40	1.92	1.02	煙0.55	25
大上3号窯	窯跡1	15.30	2.55	6.20	6.54	1.12	2.17	1.80	0.96	0.62×0.46	25
大上4号窯	窯跡1	17.22	2.40	7.20	7.70	1.14	2.35	1.80	1.41	0.58×0.50	25
窯跡3号窯	窯跡1	11.36	2.40	6.30	2.65	0.84	2.10	1.68	1.08	0.70×0.46	25
窯跡7号窯	窯跡1	11.20	1.94	5.60	2.80	0.98	2.40	1.98	1.20	0.88×0.68	23

表4 各窯の規模一覽

その他の遺構としては、窯の焚口左側部分で、製品の仮置き場と考えられる土坑が検出されたが、右側の平坦面では遺構は認められなかった。

(2) 焼成個数・回数について

調査で出土した焼台は全て碗用である。小皿に焼台片が溶着した資料も見られないことや、碗の中に小皿が溶着した資料(図版10溶着資料1)も見られることから、碗の中に小皿を入れて、焼いていた可能性が高い。窯内で出土した完形と思われる焼台は143個で、その平均は1212gであり、各地区で出土した破片も含めた焼台1243個体の重さは約870個体分の重さとなる。窯内の焼台の推定総数は350個前後であるから3回程度は焼成を行っていることとなるが、床面が6枚見られることから6回以上は焼成が行われていると想定される。出土した溶着した資料で最多の枚数は碗、小皿ともに8枚である(図版10溶着資料2・3)。想定される窯内の焼台は350個前後と想定されるため、8枚重ねた碗の一番上に小皿を8枚重ねて焼いたと考えると一度の焼成で碗、小皿ともに約2800個ずつ焼成したと考えられる。ただ、底部が4分の1以上の計測できた個体が小皿は碗の3分1程度であることから、小皿の焼成個数は少ない。

窯道具として碗や小皿を用いた蓋がみられ、図版10溶着資料3のように底部内面中央にのみポロや自然釉が見られず、その他の内面にポロや自然釉が付着するものは、重ね焼きした小皿の上に碗の蓋を置いたのではなく、小皿の蓋を用いたであろう。

(3) 遺物について

11号窯では碗や小皿以外に片口碗や平高台皿、蓋、瓶類も生産されている。

碗・小皿は体部下半に弱い丸みを帯びて立ち上がるものと、直線的に立ち上がるものが見られ、後者の割合が多数を占める。本窯の時期である5型式は従来から可見市、土岐市、多治見市の窯が共通の編年に用いられることから問題点が指摘され、多治見市と土岐市で分ける編年案が提示されている(岡本2005)。また、型式がスムーズに変化しないことから旧可見郡、旧土岐郡において浅間窯下1号窯期から窯洞1号窯期にかけて2系統が見られることも指摘されている(山本2015)。それらの編年から本窯の出土遺物を比べると、丸石3号窯期の末から窯洞1号窯期が主体の時期であると考えられる。また、底部が薄くなる碗や器壁の薄い小皿が少量見られることから、白土原1号窯期の萌芽が見られる。

この時期は各窯の規模が定型化しておらず、製品にも法量や内面に指ナデが入る割合なども各窯によって差異がある。山茶碗を生産する窯が増える時期でもあり、統一性が見られない時期といえる。

(4) 大森奥山古窯跡群の中の位置づけ

大森奥山古窯跡群は昭和60年に調査され、今回調査された大森奥山11号窯跡の西側では丸石3号窯期の窯跡が4基、白土原1号窯期の窯跡が1基調査されている。遺物の様相から、やや時間幅は広いが本窯は丸石3号窯期末から始まり、窯洞1号窯期末頃までの時期と考えられる。従来考えられている大森奥山古窯跡群の変遷に加えると、2号窯→4号窯→5号窯→6号窯→11号窯→3号窯との変遷が予想される。新規に発見された未調査の12号窯も表採資料から11号窯と近い時期であり、同一丘陵で移動をしながら継続的に山茶碗生産を行っていたことが想像される。周辺にはまだ未調査の窯が存在しており、今後の調査の進展により大森奥山古窯跡群の実態がより明らかになるとと思われる。

〈参考文献〉

- 岡本直久 2005 「山茶碗編年の現状について」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』中央大学
- 河野典夫他 2016 「住吉古窯跡発掘調査報告書」多治見市教育委員会
- 澤村雄一郎他 2003 「丸石古窯跡群」財団法人 岐阜県教育文化財団
- 田口昭二他 1985 「大原古窯跡群発掘調査報告書」多治見市教育委員会
- 長瀬治義 1985 「大森奥山古窯跡群発掘調査報告書」可見市教育委員会
- 檜崎彰一他 1981 「北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書」多治見市教育委員会
- 林順一他 2003 「窯洞1号窯跡発掘調査報告書」土岐市教育委員会
- 山内伸浩他 1990 「明和古窯跡群発掘調査報告書」多治見市教育委員会
- 山内伸浩他 1991 「北小木古窯跡群発掘調査報告書」多治見市教育委員会
- 山内伸浩他 2010 「美濃窯(瓷器系)」『古陶の譜 中世のやきもの-六古窯とその周辺-』
- 山本智子 2015 「美濃国山茶碗編年の現状と暦年代-中世前半を中心に-」
「第34回 中世土器研究-中世土器研究中輪資料の検討-」日本中世土器研究会
- 若尾正成 1989 「大蔵迫間古窯跡群発掘調査報告書」多治見市教育委員会



完掘状況 (南東より)



断ち割り全景 (南東より)



調査前 (南東より)



検出状況 (南東より)



窯内C-C'西側土層 (南東より)



窯内C-C'東側土層 (北西より)



窯主軸土層 (北より)



窯主軸土層 (南西より)



焼台検出状況 (南より)



完掘状況 (南より)



完掘状況 (東より)



ダンパー部分 (北東より)



完掘状況 (北西より)



焼成室上方 (北西より)



分炎柱 (南東より)



分炎柱上面 (南東より)



C-C'右側床面断ち割り (南東より)



C-C'右側床面と壁断ち割り (南東より)



C-C付近'主軸断ち割り (北より)



窯中央付近6枚の床面 (南東より)



E-E'左側床面断ち割り (南東より)



E-E'左壁断ち割り (南東より)



分炎柱断ち割り (南東より)



分炎柱断ち割り (北より)



1T焚口側掘り抜き排土 (南より)



1T土層全景 (西より)

図版 5



1T土層全景 (南より)



2T南側土層全景 (東より)



2T北側土層全景 (南より)



3T完掘状況 (東より)



i-i'北側土層 (南東より)



j-j'土層 (南より)



e-e'土層 (北東より)



SK1完掘状況 (南東より)



窯南区完掘状況 (東より)



g-g'土層 (南東より)



h-h'土層 (北東より)



f-f'土層 (南西より)



窯北区盛土内遺物・焼台出土状況 (東より)



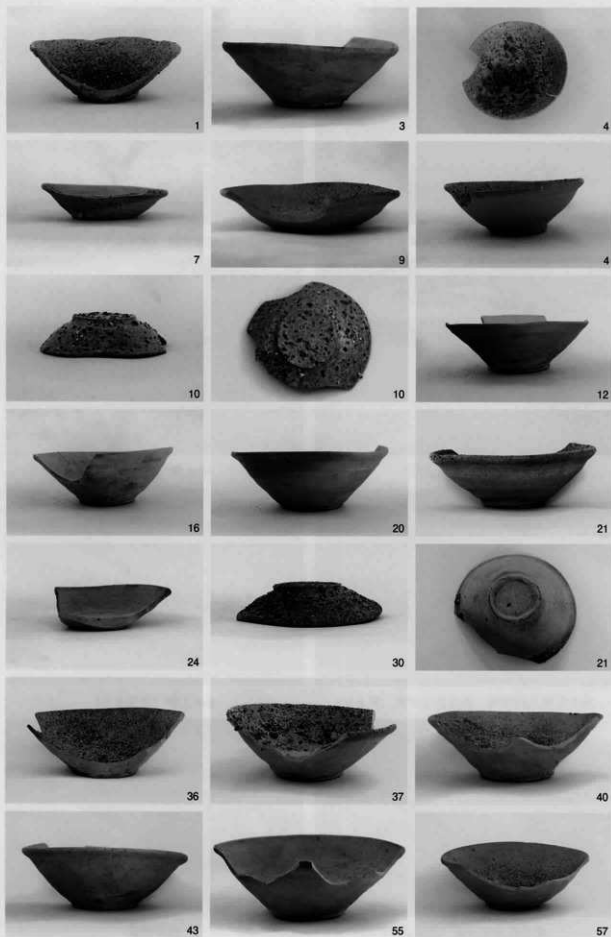
d-d'土層 (北東より)



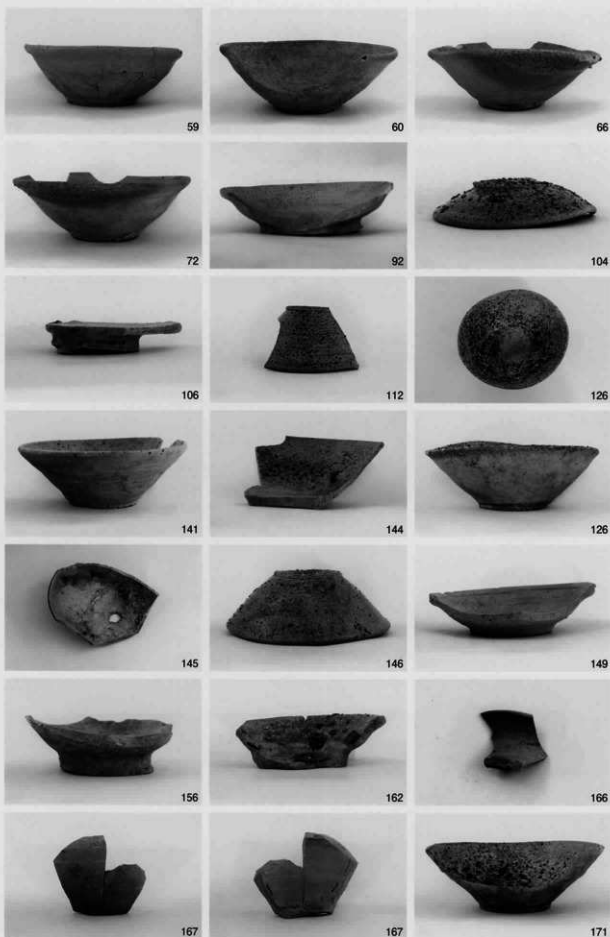
窯北区完掘状況 (北東より)



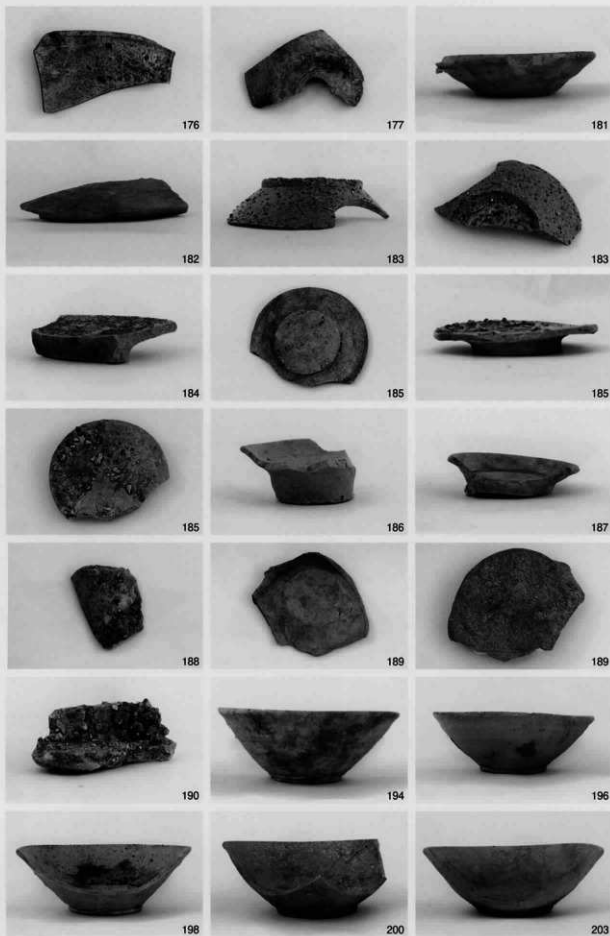
作業風景



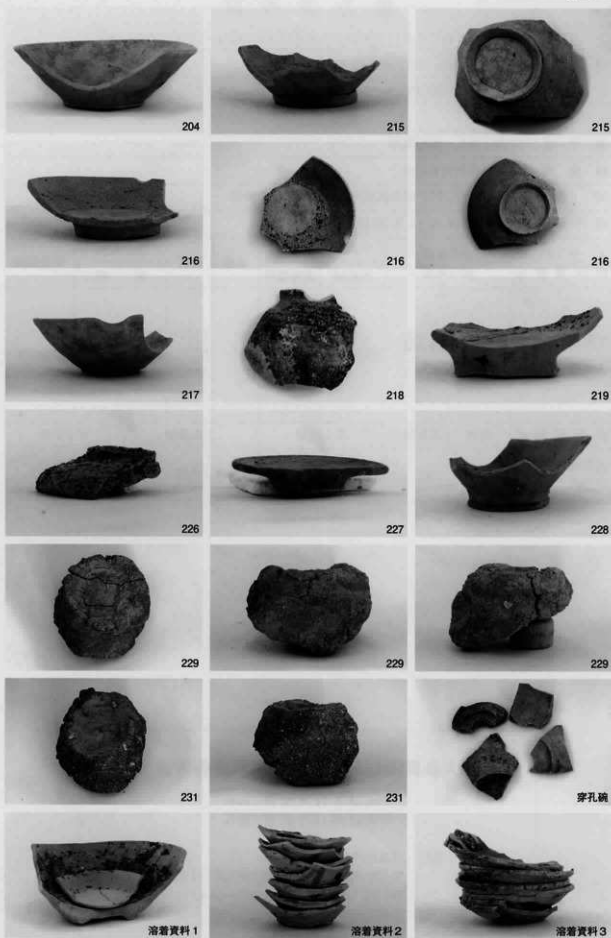
出土遺物 1



出土遺物 2



出土遺物 3



出土遺物 4

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおもりおくやま11ごうこようせきはつつちようさほうこくしょ						
書名	大森奥山11号古窯跡発掘調査報告書						
シリーズ名	可見市埋文調査報告						
シリーズ番号	49						
編集者名	長江真和 織田真琴						
編集機関	可見市教育委員会						
所在地	〒509-0292 岐阜県可見市広見一丁目1番地						
発行年月日	西暦2016年11月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地名	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号			面積	
おおもりおくやま 大森奥山11号 古窯跡	おおもりおくやま 岐阜県可見市大森 1501番6457	21214	11676	35° 23' 0"	137° 5' 35"	20160125 ~ 20160325 504㎡	宅地開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
大森奥山11号 古窯跡	生産遺跡	中世	窯体、作業場	山茶碗、小皿		窯洞1号窯期が主体の窯跡	

大森奥山11号古窯跡発掘調査報告書

平成28年11月30日 印刷

平成28年11月30日 発行

編集・発行 可見市教育委員会
〒509-0292 岐阜県可見市広見一丁目1番地
Tel 0574-62-1111 Fax 0574-63-6751
印刷 丸理印刷株式会社